

平成 20 年度 厚生労働省社会福祉推進事業

「受刑者及びその家族の不安を軽減し、社会的困窮者を包み込む為の地域生活支援協働モデル事業」

# 共感・更生・理解

- 矯正施設との文化交流等事業実施報告書 -

社会福祉法人 南高愛隣会（コロニー雲仙）

## 矯正施設と福祉施設との相互理解の必要性

平成 21 年度地域生活定着支援センター（以下「定着支援センター」という）の全国設置がスタートする。この定着支援センターの機能が円滑かつ効果的に運営される為には、いくつかの課題が残っており、今後実践を積み上げていく中で解決していくことが望まれる。その課題の一つと言えるのが矯正施設等を退所する障害者が利用する福祉施設の養成と確保である。福祉支援を必要とする障害者と言っても、矯正施設入所者に対する偏見は歴然と存在し、悪いイメージとして捉えられてしまっている現状がある。この定着支援センターの役割で最も重要で時間を要するのが、この利用施設のあっせん確保である。したがって、矯正施設と福祉施設との垣根をとり、遠い存在から相互理解という「近寄り」に醸成していく上では、実際の「ふれあう」から得るものが大きいと思われる。また同時に矯正施設入所者の「更生」に役立てるものと考え、一つのモデル的試みとして文化交流とボランティア交流を実践した。この実践は、刑務官、矯正施設入所者、福祉施設利用者はもちろんのこと、福祉施設職員においてもその「近寄り」から「知る」そして「理解」に変わり、利用施設の養成、確保につながっていくものと痛感し、全国各地で実施されることを希望するものである。





## 平成 20 年度社会福祉推進事業 矯正施設との文化交流等事業の実施

## 【総論】

矯正施設との文化交流等事業の一環として知的障害のある人たちによる和太鼓（瑞宝太鼓）の公演を 15 施設で実施し、講習や交流を深めることにより、勇気や感動の輪が広がり、更生意欲の促進に役立ったといえる。同時に出所予定者の福祉事業所等でのボランティア体験を実施（佐世保刑務所）した所、出所予定者への改心や勇気付けの機会になったのみならず、矯正施設の刑務官や福祉事業所の職員の心的変化、心のバリアフリーの観点で大きな効果が見られた。罪を犯した障害者の社会生活移行の取り組みが叫ばれる中で、福祉と矯正とを結ぶ架け橋は現実的に体験や知識等の理解不足から双方に大きな心のバリアが存在することが改めて判った。しかしながら、障害のある当事者たちの力（おらかさ）を前面にし、交流を実施する中で互いの偏見や差別的な心情は軽減され、歩みより理解しあおうとする前向きな姿勢と思いやりの心さえ見出すことができた。

## 1. 和太鼓・演劇等の公演を通して交流を図り、更生への意欲を引き出す。

## 目的

罪を犯した人たちが、更生していくために矯正施設においては様々な教育・訓練が実施されているところであるが、その内容に個々人の興味や関心を引くものが含まれその幅が広がれば一層の効果が期待できる。文化面もその要素の一つであると考えられる。

そのようなことから矯正施設において和太鼓・演劇等の公演と交流を図りその効果等をまとめ、これからの更生プログラムの充実につなげると共にそれぞれの地域で出所後の安定した地域生活につなげる。

対象少年院・刑務所公演及・交流  
日程と演奏場所等 全 15 か所

年 月 日		矯正施設	
平成 20 年	10 月 24 日	大分少年院（大分県）	50 名
	27 日	中津少年学院（大分県）	70 名
	11 月 20 日	加古川学園・播磨学園合同（兵庫県）	200 名
	12 月 20 日	大分刑務所（大分県）	1,000 名
平成 21 年	1 月 13 日	筑紫少女苑（福岡県）	50 名
	19 日～21 日	北九州医療刑務所（福岡県）	200 名
	26 日	岡山少年院（岡山県）	70 名
	27 日	貴船原少女苑（広島県）	30 名
	"	広島少年院（広島県）	110 名
	2 月 20 日	人吉農芸学院（熊本県）	90 名
	27 日	佐世保刑務所（長崎県）	470 名
	3 月 4 日	丸亀少女の家（香川県）	30 名
	5 日	四国少年院（香川県）	50 名
	6 日	松山学園（愛媛県）	30 名

注 1 刑務所での演奏が少年院に比べて少ないのは、公演への取り組み自体が、少年院では「教育の一環」、刑務所では「娯楽」という位置づけであることからの受入れ可否が要因。

注 2 公演先は当初九州圏内としていたが、上記（注 1）の理由から新たに中国・四国地方を追加し、西日本地区とした。

## 実施施設

瑞宝太鼓（就労継続支援 A 型事業所、長崎県雲仙市）

注 知的障害者 6 名で構成するプロの和太鼓集団。全国津々浦々を公演活動でまわり、年間 100 ステージをこなす。

方法

事前準備・演奏・講習会

事前学習として、瑞宝太鼓の練習風景や楽譜を読めないメンバーが曲を覚える姿、結婚して子育てをする私生活、営業をする姿など、演奏だけではわからない障がいの部分をドキュメントにしたテレビ番組を観てもらおう。

院生・受刑者に対する公演後のアンケート集計結果

結果まとめ アンケート総数 733 名

演奏を聴く前の感想はいかがでしたか？ あてはまるものを一つで囲んでください。

1. 演奏が楽しみだった	528 名	(72%)
2. 特に意識してなかった	164 名	(22%)
3. あまり見たくなかった	5 名	(1%未満)
4. 全く興味がなかった	19 名	(3%)
5. その他	23 名	(3%)

考察：DVD を事前視聴していることもあり演奏前から楽しみにしてもらっている。

演奏を聴いた時の感想はいかがでしたか？ あてはまるものを複数可で囲んでください(複数可)

1. 楽しかった	491 名	(66%)
2. 感動した	500 名	(68%)
3. 勇気が出た	401 名	(54%)
4. また聴きたいと思う	460 名	(63%)
5. 少し楽しかった	35 名	(5%)
6. あまり楽しくなかった	7 名	(1%未満)
7. 全く楽しくなかった	5 名	(1%未満)
8. その他	57 名	(8%)

考察：ほとんどの方が感動し、楽しんでもらっている。勇気元気をもらった楽しいひとときを越え、また聴きたいという気持ちにも膨らんでいる。

プレーヤーの障がいについてどう思いますか？ あてはまるものを一つで囲んでください

1. 障がいがあるということは意識しなかった	378 名	(52%)
2. 障がいがあるのにがんばっていると思った	284 名	(39%)
3. その他	66 名	(9%)

考察：聴いてみて障がいの有無を感じないほど演奏が上手かったことから、メンバーと健常な自分とを比べて、自分にできることを見つめなおす機会となった回答が多い。

演奏をみてあなた自身が何か影響を受けたことがありましたか？ あてはまるものを一つで囲んでください。

1. あった	593 名	(81%)
2. すこしあった	109 名	(15%)
3. ほとんどなかった	59 名	(8%)

考察：96%の方が何かしらの影響を受けている。「障がいがある」ということと演奏力のギャップの影響が大きい。

あなた自身が立ち直るのに役立ったと思いますか？		
1. 非常に役に立った	482 名	( 66%)
2. 少し役に立った	199 名	( 27%)
3. あまり役に立たなかった (効果がなかった)	40 名	( 5%)

考察：93%の方が自分自身の更生するに役に立ったことを確信している。

### 講習会の様子

北九州医療刑務所にて (1 時間講習 × 2 日間) 受講生 10 名	
講習 1 日目	<p>刑務官より「受講生は本人の希望で参加するが、日頃から持続性がなく人の話を聞かない人もいるから…」という事前のお話を受けた。入ってきた方たちは 20 代から 60 代の方まで 10 名。落ち着きのない人、姿勢が真っすぐできない人、ヘッドギアを付けて両脇を抱えられて歩いてきた人、様々だ。まずはストレッチや発声練習からはじめ、それから好きなように太鼓をたたかせてみる。殴るようにたたく人、なでるようにたたく人、これも様々。そしてパチの持ち方や構え、叩き方、順をおって話を進めていくとだんだんそれらしく変わっていき初日は見よう見まねで基本打ちがマスターできた。この間、瑞宝メンバーは受講者の横につき一緒にやってみたり声をかけたり並んでいる受講者の隙間を動き回り笑顔を絶やさない。受講生も声をかけられると笑顔で返す。ヘッドギアの彼は抱えられてきたのにシャンと立って叩いている。意外だったのは、説明をしている時に聞き逃すまいとする真剣なまなざし。この表情には刑務官の方々も驚いていた「日頃は話を聞かないのに！」と。</p>
講習 2 日目	<p>刑務官より「今日は昨日のメンバーがすべて来るとはかぎらないですよ。体が痛くなるとか気分が乗らんとか理由つけて来ないかも」との話を受けた。しかし、昨日のメンバーが全員来場、しかも一人増えている。その新人さんは問題を起こして独居房に入ることが多い人。出てきたばかりで気が向いたらしい。まず昨日のストレッチと発声と基本打ちから始めるが、昨日初めて叩いた時とは姿勢が微妙に違う。昨日よりも複雑になった話を聞こうとする視線も明らかに違う。「ヤー」という掛け声も違う。明らかに「意欲」を感じる。基本打ちを変化させて簡単な曲ができあがったが、最後にポーズを決めるところも「どうだ！」という自信をもった「意思」が込められている。最後に完成した曲を披露し、回りにいる刑務官から拍手をもらう。うまくできた時にはハイタッチ (両手を高くあげパチンと手をたたき合う) をするんだよと投げかけ、受講生と瑞宝メンバーと刑務官の人たちと総当たりのハイタッチを笑顔で締めくくった。会場を出ていく受講生は皆うれしそう。ヘッドギアの彼もまた両腕を抱えられ、新人の彼も一日だけだったが案外と技を習得して満足そうだった。</p>
講習についての感想	<p>太鼓という単純な構造の楽器だからこそ体感できることを実感した。叩けば音が出る、メロディがないから音痴とか関係ない、打ち方によってどんどん変わっていく変化の面白さ、大声を出して発散できる、みんなと合せることで連帯感を味わえる、とっておきの教材だと感じた。また今回は技術の習得ではなく「体験と交流」だったが、意外な集中力を発揮して 2 回の経験である程度の基本も体得でき、また障がいのあるメンバーとの交流も教える、教えられる立場を通じて同じ空間で楽しみ合うことができた。刑務官の「太鼓指導をとりいれたいなア」という一言に手応えが詰まっていた。出所後の社会生活の中、予測される困難な人間関係においてまずいろんな人と関わる準備段階として、初めての太鼓講習で今回目的が達成できたように感じた。</p>

職員の感想（矯正施設）

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 瑞宝太鼓公演を見て心に響いていることは確かだし直後に書いた感想文が正直な気持ちだろう。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日々の指導や行事を積み重ねていくことによって成長が見られるため、瑞宝太鼓を見たからすぐに変化するということは表現しにくい。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 回目に見る少年は前回見た時の音のすごさや迫力などの感想を話してくれるので、そんな時に少年たちの心の中に瑞宝太鼓が残っていることを感じる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 親や環境など罪を犯すための彼らなりの理由があり、人のせいにしていく段階では更生が難しい中、「誰のせいでもない、自分が罪を犯したからここにいる」という自分を見つめるための気づきを瑞宝太鼓は教えてくれる。そして、だから頑張ろうということにつながっている。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 少年たちはいろんな意味でのハンディを抱えたことになり、その自分の姿とハンディを持ちながら頑張っている瑞宝太鼓の姿が重なって、一生懸命やればできることをしっかり感じている。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 少年たちは差別をした側にあり、人に優しくすることなどカッコ悪いという価値観を持っているが、その価値観をひっくり返すことに一役かってくれた。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 太鼓の講習で受講した人たちは「また太鼓がしたい」と言っている。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講習では、日頃から人の話を聞かない受刑者がきちんと話を聞き、みんなと太鼓を合わせようとする姿に感動した。</li> </ul>

まとめ

北九州医療刑務所の反響の大きさや、アンケートの集計からもわかるように、受刑者等からの「影響を受けた・更生に役立った」という感想が圧倒的に多い。特に演奏をするメンバーに障がいがあるということが共感にも大きく影響していることが伺える。

また、精神障害者の矯正施設である北九州医療刑務所で行った「交流」は刑務官の予想に反して多くの受刑者に好まれた。これは、ゲストの演奏を単に聴く側から交わり、一緒にたたくという共同作業の中から生まれた生き生きとした心の響き合いであった。これらのことから、地域社会には和太鼓のみならず沢山の文化や芸術そしてそれらに係る個人・団体が存在する。これらがもっと交流し、活かすことで同様の効果は期待できるものと思える。



## 2. 出所予定者の福祉施設等でのボランティア体験の実施

### 目的

出所を間近にひかえた受刑者に対し、実際の社会と触れ合うことで社会適応訓練の第一歩の場面づくりを行う。また、福祉施設等へ訪問し、障がいのある方たちと触れ合うことにより社会貢献の意味合いを体感し、生きる力の弱い人たちとの出会いにより人様のお役に立つ活動への関心を持って頂く。そして、今後の自らの生き方を考える機会として頂く。

### 対象支援施設

九州圏内で上記目的に賛同・協力を得られる矯正施設の出所予定者

大分、長崎へ協力依頼をするが、それぞれの事情にて今回は実施できず、佐世保刑務所の一箇所となった。

### 実施施設

佐世保刑務所（長崎県佐世保市） はびねす佐世保（生活介護事業所、長崎県佐世保市）

平成 20 年 11 月 26 日～ 週 2 回のペースで実施

### 方法

福祉施設での交流を含めたボランティア活動を行い、受刑者、矯正施設の職員、受け入れ福祉施設の職員 3 者の感想をもとに、このボランティア活動の体験が受刑者にとってどのような効果があるのかを検証する。

別紙 1 別紙 2 感想より抜粋

注 対象者は、障害者に限らず一般の仮出所予定者の中から矯正施設による人選で一回につき 2~3 人行った。

### プロセス

本事業におけるボランティア活動のプロセス		
矯正施設	福祉施設	コーディネート
←		← 依頼
~ 矯正・福祉側両者の承諾が得られた場合 ~		
環境調整（確認） 福祉事業所への事前視察	ボランティア受け入れにあたっての矯正施設との具体的打ち合わせ（時間・場所・頻度・注意事項等）	協定書作成・契約
協定書締結		
出所予定者への事前教育・事前調査 出所前の教育プログラムとしての位置付で実施	活動内容等の検討	矯正施設内仮釈放前教育の事前説明・見学
実 施		
【 1 名の出所予定者につき 2 週連続（2 回）のボランティア実施】		
出所予定者・刑務官のアンケート調査実施（毎回）	福祉事業者のアンケート調査実施（毎回）	アンケート依頼（両者の意識調査）

## 効果

### 受刑者

アンケート調査によると、このボランティア活動が、今までの自分の生き方を振り返る機会であったこと、さらには、今後の自分の生活等について考える機会になったことなど、受刑者にとってはとても良い影響があったとの記載が多い。この活動に参加されたことにより、1 つでも何かを変えるきっかけになり、刑期を終えて社会で生活する中で、今回出会った障害のある人たちのように、一生懸命生きていきたいという思いにつながった受刑者はたくさんおられた。さらに、佐世保刑務所においては、週 2 回実施し、1 回目と 2 回目で受刑者の心の変化もみられ、心のバリアが軽減したことがわかる。

### 矯正施設

刑務官あるいは受刑者という前に、1 人の人間としてこの社会で生きていくことの大切さを感じられたり、受刑者が障害者に対して、彼らの置かれている状況を知り、「障害者をいたわる心が芽生えたように感じられた」など、刑務所の中での関わりだけでなく、新たな一面を見ることができたとの感想があった。身構えていた受刑者が、障がいのある方々の、屈託のない言動に心を開く場面も多くあったとのことだった。さらに、刑務官自身が変わったと話されており、出所予定者のみならず、この活動を実施することの影響力は大きいと感じる。今回のような活動をする中で、矯正施設側が福祉のことに関して深く知るきっかけとなり、矯正施設の中にも IQ75 以下という人はたくさんいるという実態を改めて認識し、今まではそのような認識も持たずにすべての受刑者に同じような処遇をしていたことを考えなおす機会となったと述べられている。矯正施設内での教育・処遇において、そのことに気付けたことで、出所後の生活を次につなげていく際に何らかの改善に役立ったのではないかと。刑務所内でビデオを見たり、講義教育以上に、実際に交流し、ふれあい、汗し、遊び、コミュニケーションをとることで、この活動が受刑者の心に響いたと所長は効果を評価した。



### 出所前に行く良さ

受刑者の、社会に出るとい意識も高まっており、自己統制が非常にとれた状態の中での実習故、今後の生き方を考えるきっかけとなると共に福祉施設にも安心感をもって対応できる。(双方とも精神的負担が少ない)

### 福祉施設



受け入れ時の不安や怖いという気持ちがスタッフの中にあった。しかし、実際接してみることでその不安はなくなったこと、この方たちの今後はどうなるのだろうと意識するようになった等の感想があった。福祉施設側としても、やはりメディアで言われる「刑務所」「受刑者」という怖い印象が強く、どうしても最初は心的壁が大きい。しかし、実際に会ってふれあってみることで、刑に服した後は同じ 1 人の人間なんだという意識に変化した。仮に、福祉の対象者である人がいたときに、受け入れていくプロセスの中でこの活動をしていたことによって、受け入れ拒否から始まるのではなく、刑期を終えた時には 1 人の人としてこれからの人生のお手伝いができないかという前向きな意見に変わった。

### まとめ

出所前の受刑者にとって、このボランティア活動は大変意義のあるものであると感じた。受刑者にとって自らの生き方を振り返る機会となり、出所後の自分の生き方について考える機会となっているようである。この活動に参加された多くの受刑者の方が、参加する前と後では何らかのプラスの気持ちの変化が見られている。矯正施設にとっては、このように、福祉事業所と定期的な関わりを持つことによって、障害があっても刑務所等に入っておられる方々の出所後の福祉活用のイメージづくりに役立つであろう。福祉事業所にとっても、ボラ

ンティア活動を受け入れることで偏見をなくし、実際に出所された方（福祉の対象者）を受け入れる時にスムーズに受け入れることができるのではないかと思う。結果、双方において心のバリアを取り除くという意味において、有効であり、また、ボランティア活動が福祉と矯正をつなぐ手立てになり得る。

別紙 - 1 ボランティア活動実施後の出所予定者の感想

	社会奉仕活動に行く前の気持ち	社会奉仕活動実施後の気持ち	今後の自分への影響について
1	不安、緊張があり、心配。	純粋な人ばかりで、色々な障害をもっているのにそれぞれ生活をされていて、心を打たれた。社会に出ても一生懸命やることを頭にいれておかななくてはならないと思った。	こんなに苦しい人がいるのに一生懸命頑張って生活をしている人がいて、この人たちには負けてはいけないという勇気もらった。自分自身に負けない強い人間になるように頑張るつもり。誰一人嫌な顔をせず、愚痴1つ言わずみんな一生懸命に仕事をやるのが勉強になった。
2	今まで全く社会奉仕活動経験がなく、不安・緊張	利用者とのコミュニケーションをとれるようになって心から嬉しかったし、もっと一緒に活動したいという気持ちになった	自分たちよりももっと大変な生活をしている人たちがいること、今の私たちはどれだけ幸せ者なのか、今という時間を無駄に生活していることに気がされた。障害というハンディをあれだけ背負っても笑顔で今の時間を大切に自分の道を進んでいる人たちをみて大きな勇気もらったし、心から考えさせられた。自分たちは、嫌だったら嫌だとすぐ言うし、顔に出したりしており、自分は小さかったと思った。自分たちよりももっと辛いところで頑張っている人がいるのでまげられない、もっと真剣に将来のことを考えて生きていかないとダメだと気がされた。
3	今まで生きてきた中で社会奉仕活動というものには全く縁がなく、どのような心構えで活動したらいいのかわからない、戸惑いがある	正直、乗り気ではなかったけど、純粋な人たちに接することで逆に癒され、自然と笑顔になり、少し心が救われた気がする。心の中があたたかくなった。	障害者の人たちは何の邪気もなく本当に純粋な心を持った人達だと思った。偏見がなくなったせいか、素直に社会奉仕活動が良いことだと思うようになった。
4	今までこのような活動をしたことがないので、不安、人と話すのが苦手なので心配	正直、初めは「エッ、やばいんじゃない」と不安だった。	今後、何かボランティアなど進んでできればと思う。障害のある人たちは一生懸命頑張っているのだから、自分もこれからどんなことがあっても負けないう、強い意思で頑張る
5	障害者相手のボランティアと聞いたとき、正直驚いたというのが実感	・ボランティア活動をしたという実感が湧かない。逆に今から出所する私たちのための社会奉仕活動であったような気がする。心のどこかで自分は健常者である、あの人たちとは違うんだと見下した気持ちがあったが、2回の奉仕活動により、障害者の人たちの一生懸命さを学び、自分の人間の狭さを恥ずかしく感じた。	どうせボランティアなら草刈や空き缶拾いにしてくれればいいのにと考えていた。今回単にそれだけなら何も感じることはなかったはず。自分を高めることになったと思う。
6	ボランティアという言葉も聞いても理解できない、何事もやってみないとわからないので、勉強になればと思う	・教える立場でいたという自分自身の考え方に恥ずかしさを感じた。・ある意味では障害を持った方のほうが、社会での仕事や将来の自分のあり方を真剣に考えているのかもしれないと思った。・何事も全力で取り組む姿勢、1つのことを黙々とこなす姿を見ていると私も負けてられないという気持ちになった。・偏見で見ていた自分が青けなく、恥ずかしい思いでいっぱい。	最初は、行きたくないというのが正直な気持ちだった。しかし、自分から心を開く大切さや、それらを受け入れる大きな心を持つことの大切さ、どんなにいやなことや辛いことでも、自分で楽しみを見つけ、地道にやることで道が開けることを短い時間で学んだ。
7	今回のボランティア活動で何か1つでも役立つことができればと思う	皆さん、素直で感受性の豊かな人たちだと感じました。障害を持った人への偏見みたいなものを持っていたが、それは全然違うと感じた。	出所後、福祉関係・介護関係で役立つことができればと思った。

2. 出所予定者の福祉施設等でのボランティア体験の実施

8	今までボランティアをしたことがないが、何でも経験することによって学ぶことが自分を成長させると思うので一生懸命取り組みたい	障害者の人たちが一生懸命やっているのに、健康な体の人が、悪いことをして刑務所にいることを考えると、情けないと思った。	出所したらまじめに生活したい。社会にでも困っている人を見たら助けたりしたいと思った
9	不安があるが、頑張りたい	実際にあってみるとすぐに打ち解けることができた。会わなければそういう気持ちにはならなかったと思う。	自分は、これまで誰かがしてくれるからいいだろうとか、人に頼ってばかりいた。全く自主性がなかった。自分はやろうと思えば何でも出来る、やろうという気持ちが大事なことがわかった。
10	障害を持つ人との関わりがなく、不安	受刑生活の自由のなさに嫌だと感じていた自分が五体満足なだけで良いほうなのだと思った。正直、障害者の人への偏見を持っていたが、本当に純粋な心を持っている人達だと思った。	何度も覚せい剤を注射し、一時の快樂のために体を壊していたことがわかった。社会にでてもからでもこのような活動ができればいいと思った。
11	不安な気持ちがある。自分のためではなく、社会の一員として何か役立つことが活動だと思うので、活動することの意味がわかればいいと思う	不安な気持ちが全くなくなり、自然と楽しい気持ちと優しい気持ちでいることに気付いた。純粋な人たちと一緒に過ごしたことで、自分で気付かなかった一面に気付くことができた	今後、色々なことで悩んだとき今回のことを思い出し、どんなことがあろうと生活することができると思う。福祉関係に興味を抱いた。自分が犯した犯罪が如何に馬鹿らしくみじめに感じるようになった。
12	戸惑いがあるが、一生懸命頑張りたい	とても純粋な人ばかりで反対に心を洗ってもらった	今まで避けていたが、自分のほうから手を差し伸べることができるようになった
13	知的障害者や体の不自由な人への社会奉仕なんてできない。自分には受け入れがたいこと。刑務所内にもいましたが、途中から知らん振りをして接触を一切しなかった	思っていた以上に楽しめた、コミュニケーションがとれた。今を一生懸命に生きていることがはっきりと伝わった。	やってよかったと思う。純粋に物事を考えている人たちに私も見習うべきところがあると感じた。
14	とてもつらいことだと思っていた。奉仕活動をするので喜んでくれる人がいるならやりたい	外の社会では、色々な人がいて、今のままでは通用しないということを改めて認識した。今後は、もっと優しい気持ちで他人と向き合っていくことができると思う。	今まで普通だと思っていたことが当たり前じゃないということに気がついた。健全な体で生まれてきた私が申し訳ない気持ちになった。もっと頑張って生活していかなければならないと思った。
15	経験もなく、不安。今回の活動が何かのきっかけになればと思う	障害者への見方が変わったと思う。障害者の人から「笑顔」「人間らしさ」を教えられた	偏見を持っていた気持ちが変わった。人との絆を深めていく上で良い活動だと思った。
16	経験がなく、何をしたいのかわからない	とても複雑な気持ちだった。戻ってきてからも考えはまとまらない。何をしたらいいのかわからない	よくわからないが、まじめに頑張って生きていこうと思った。前向きに頑張っている姿が美しかった。まじめな生き方が正しい生き方だと強く思った
17	コミュニケーションがとれるようにしたい、相手への偏見もなくしたい	正直、関わりたくないという気持ちがあった。気持ちの中で怖かったから。体は不自由だが、普通の人と変わらないことがわかった。喜んでくれて嬉しかった	街で障害者の人にであつたら手を貸そうという気持ちはなかったが、機会があればやりたいと思う気持ちが今はある

18	不安でたまらない	とにかく、楽しかった。思っていた以上に時間が短く、もっと長く接することが出来ればと、寂しい気持ちになった。	何に役立つのかはわからない。しかし、ハンディのある人へ接する機会があれば優しく笑って接することができそうな気がする。
19	自分のために参加したい	コミュニケーションがとれずに、迷惑をかけたのではないかと思う。2回目は、もっと長い時間活動したかった。時間に余裕があれば活動時間を延長してもらいたい	私たちは健康なからだをしているが、障害者の人達はそうでないのに、不自由な生活を強いられていることに納得がいかなかった。社会復帰して参加する機会があれば活動したい。
20	ボランティアをしたことはないが、興味はあったので、経験してみたい	健全な人たちよりも一生懸命前向きに取り組んでいると思った。社会では絶対に経験することができなかったのが、貴重な体験ができた	自分も社会に戻ったときにはもっと真剣に取り組んで努力していこうと思った。
21	今回の経験で何か1つでも学べたらいいと思っている。	1回目は不安と緊張があったが、徐々に不安もなくなり、コミュニケーションがとれた。障害を持った人から話しかけてきてくれたので助かった。	この活動を通して気付いたことは、まじめに頑張れば結果は必ずでくるといこと。障害者の人達も礼儀正しい人達ばかりで、私もしっかりしないといけないと感じた。皆純粋な人達であり、みんなが優しくかったので、私も誰に対しても障害者の人たちと同様に接し、人が嫌がることはしないようにしたいと思った。
22	ボランティア活動というのは、老人ホーム等で活動するイメージ	自分たちのほうが元気をもらった。復帰間近の受刑者にとって大変良い体験であり、勉強になった。このような活動をもっと増やしてもらいたい	あんなに一生懸命生きている姿を見ていると自分も更生できる、強く生きることが出来るという気持ちになれた。本当にボランティアに参加することができてよかった。
23	今までも社会奉仕活動をしてきた。ごみ拾いや草刈などのボランティアにも参加したことがある	社会に出れるというのが一番新鮮に感じた。活動時間が短かったので、もっと長い時間障害者の人達とかわりたいたいと思った	頑張ろうという勇気を頂いた。

## 別紙 - 2 矯正施設の職員の感想

・ 一瞬、身構えてしまうほど強烈な印象を受けた。回数を重ねるごとに障害者の人の素直な優しさに触れることができた
・ 収容者と刑務官という立場があるため、一緒になって活動することはないが、いざ、その壁を取り除くとやはり普通の人間であり、一緒に笑い、一緒に汗をかくとなぜ罪を犯すのかとふと思い、複雑な気持ちになった。
・ 体が思うようにうごかなくても頑張っているという姿を多くの受刑者に見せることで彼らの社会復帰後の生活にもすこしながら影響がでるのではと思われた
・ 素直で純粋な気持ちの障害者の人たちに接することで、受刑者も自分の気付かない新たな面に気付くことができると思う。偽善ではなく、心から相手を思いやる心。そのような心を養うためにも今後この活動を継続していく必要がある
・ 素直に、優しくそして厳しく丁寧に相手の気持ちを感じる必要が大切であることを改めて考えさせられた
・ 受刑者も良い表情をし、一生懸命に活動していたので、刑務官という仕事が今まで以上に好きになった
・ 一緒に行っている自分もこの人達の役にたっているんだと思い、嬉しくなった
・ 初めてボランティアをはじめたときは、社会の人たちの視線が気になり恥ずかしいという気持ちがあったが、今では全く気にならなくなった
・ 障害者に対する考え方が変わった。弱い人たちは助け合っているのに、自分たちは何をしていたんだろうと反省をしている受刑者がいた。活動している全てが、自分のためになったと回答していた
・ 単なる奉仕活動と違い、障害者と接することは必要以上に神経を使っている気がする。活動後も興奮している自分に驚いている
・ 受刑者が障害者に対して、彼らの置かれている状況を知り、障害者をいたわる心が芽生えたように感じられた
・ 活動に参加する人たちの心情に変化をもたらすためには、もっと自分が積極的に活動に加わる必要がある
・ 受刑者だけでなく、私もまた人の素直な温かさを感じた良い機会になった
・ 思いやりの心も大事だが、理解すること、障害者の人たちが何を考えているのか何をもめているのか一歩先のことを考える必要があると思う
・ 職務では常に厳しい態度で受刑者に接しているが、奉仕活動中は受刑者としてではなく、一緒に活動していることから、受刑者に対する感情がきもちだけではあるが、少し優しくなれた気がする
・ 「してやる・させられる」とかではなく、障害者の人たちと素直に接することですがすがしい気持ちになったが、受刑者と共同作業を行うことについて疑問があった。1人は介護職員としてそばにいたべきだと思った
・ 「良い体験をした社会では絶対にしない」との本音を聞くことができた
・ 慣れるのではなく、教えられることが多いことに驚いている
・ 受刑者が奉仕活動という形で役にたつことができるのはいいことだと思う。
・ 1回目と2回目では障害者に対する思いやりが全然違っている。「自分のため」という感想から、とても貴重な経験になったと感謝をしている感想が多い。

## 福祉施設の職員の感想

・ 受け入れのときは、正直不安や怖いという気持ちがあったが、接する中でそのような気持ちはなくなった。
・ はじめての交流に関しては、事前の念入りな打ち合わせにより、スムーズに入ることができた
・ お互い緊張した面持ちであったが、徐々に会話が増え、受刑者から積極的に手助けする場面が増えてきた
・ 室内活動では、特に利用者とのコミュニケーションがとれる環境にあり、利用者との会話に家族や住所等の個人情報が含まれる会話があり、気をつける必要も感じた
・ 受刑者が数の苦手な利用者へ親切に一生懸命説明しながら取り組んでいた
・ 受刑者の表情が柔らかく、積極的に利用者の手伝いを行っていた
・ 受け入れ人数が多く、利用者の中には不安定になる方がいらっしやう、配慮が必要な部分もあった
・ 中には、福祉的に向いている方もいたのではと感じる方がいた。
・ 出所後、どのような生活をするのだろうかと思った。生活の場がなく、また戻っていく方もたくさんおられるとのこと。それを少しでもなくし、この活動を通して社会復帰へつながっていくなら良いことだと思う。
・ 利用者の皆さんも、「今日はボランティアの人が来る」と笑顔が見られて楽しく活動ができたと思う。



平成 20 年度 厚生労働省社会福祉推進事業

「受刑者及びその家族の不安を軽減し、社会的困窮者を包み込む為の地域生活支援協働モデル事業」

「共感・更生・理解 矯正施設との文化交流等事業実施報告書 - 」

編集・発行 社会福祉法人 南高愛隣会（コロニー雲仙）  
〒859-1215 長崎県雲仙市瑞穂町古部甲 1572  
TEL 0957 - 77 - 2137 FAX 0957-77-3966  
<http://www.airinkai.or.jp/>

印刷所 後藤印刷